

8/18 Sun.

大成建設 Presents 読響サマーフェスティバル2019
《三大交響曲》東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
YNSO SUMMER FESTIVAL 2019 "THREE GREATEST SYMPHONIES";
presented by Taisei Corporation / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Conductor
コンサートマスター
Concertmaster

マルチェロ・レーニンガー -p.5
MARCELO LEHNINGER
長原幸太
KOTA NAGAHARA

シューベルト
SCHUBERT

交響曲 第7番 口短調 D759 《未完成》 [約25分] -p.9
Symphony No. 7 in B minor, D759 "Unfinished"
I. Allegro moderato
II. Andante con moto

ベートーヴェン
BEETHOVEN

交響曲 第5番 ハ短調 作品67 《運命》 [約31分] -p.10
Symphony No. 5 in C minor, op. 67
I. Allegro con brio
II. Andante con moto
III. Allegro - IV. Allegro

[休憩]
[Intermission]

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

交響曲 第9番 ホ短調 作品95
《新世界から》 [約40分] -p.11
Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"
I. Adagio - Allegro molto
II. Largo
III. Molto vivace
IV. Allegro con fuoco

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
特別協賛：大成建設株式会社
協賛：NTTコミュニケーションズ株式会社
事業提携：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

 **大成建設**
Taisei
For a Lively World

8/21 Wed.

大成建設 Presents 読響サマーフェスティバル2019
《三大協奏曲》東京芸術劇場コンサートホール 18時30分開演
YNSO SUMMER FESTIVAL 2019 "THREE GREATEST CONCERTOS";
presented by Taisei Corporation / Tokyo Metropolitan Theatre 18:30

指揮
Conductor
ヴァイオリン
Violin

マルチェロ・レーニンガー -p.5
MARCELO LEHNINGER

高木凜々子 -p.7
RIRIKO TAKAGI

チェロ
Cello

アレクサンドル・ラム -p.7
ALEXANDER RAMM

ピアノ
Piano

アレクサンダー・マロフェエフ -p.8
ALEXANDER MALOFEEV

コンサートマスター
Concertmaster

小森谷巧
TAKUMI KOMORIYA

メンデルスゾーン
MENDELSSOHN

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64 [約26分] -p.12
Violin Concerto in E minor, op. 64
I. Allegro molto appassionato - II. Andante -
III. Allegretto non troppo - Allegro molto vivace

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

チェロ協奏曲 口短調 作品104 [約40分] -p.13
Cello Concerto in B minor, op. 104
I. Allegro
II. Adagio ma non troppo
III. Allegro moderato

[休憩]
[Intermission]

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

ピアノ協奏曲 第1番 変口短調 作品23 [約32分] -p.14
Piano Concerto No. 1 in B flat minor, op. 23
I. Allegro non troppo e molto maestoso - Allegro con spirito
II. Andantino semplice
III. Allegro con fuoco

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
特別協賛：大成建設株式会社
協賛：NTTコミュニケーションズ株式会社
事業提携：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

 **大成建設**
Taisei
For a Lively World

8/24 Sat.

第219回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.219 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

8/25 Sun.

第219回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.219 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Honorary Guest Conductor
ヴァイオリン
Violin
コンサートマスター
Concertmaster

メンデルスゾーン
MENDELSSOHN

メンデルスゾーン
MENDELSSOHN

[休憩]
[Intermission]

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

尾高忠明 (名誉客演指揮者) -p.6
TADAAKI OTAKA

アナ・マリア・ヴァルデラーマ -p.8
ANA MARIA VALDERRAMA
長原幸太
KOTA NAGAHARA

序曲〈フィンガルの洞窟〉作品26 [約10分] -p.15
"The Hebrides" Overture, op. 26

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64 [約26分] -p.12
Violin Concerto in E minor, op. 64
I. Allegro molto appassionato – II. Andante –
III. Allegretto non troppo – Allegro molto vivace

交響曲 第6番 ロ短調 作品74 〈悲愴〉 [約46分] -p.16
Symphony No. 6 in B minor, op. 74 "Pathétique"
I. Adagio – Allegro non troppo
II. Allegro con grazia
III. Allegro molto vivace
IV. Finale : Adagio lamentoso

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

指揮

マルチェロ・レーニンガー

MARCELO LEHNINGER, Conductor

天性のリズム感が冴える
気鋭が振る名曲選



©Andy Terzes

天性のリズム感とダイナミックな音楽で聴衆を惹きつけるブラジル生まれの新鋭。クルト・マズア、スラットキンらの薫陶を受けて世界中で活躍している。読響初登場の今回は、〈未完成〉〈運命〉〈新世界から〉の三つの名曲を一挙に披露。また《三大協奏曲》ではフレッシュな3人のソリストを盛り上げる。

ヴァイオリンとピアノを学んだのち、米バード大学でファーバーマンに指揮を学ぶ。マズアに認められ、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管、ニューヨーク・フィルなどで彼のアシスタントを務めた後、ロサンゼルス・ニューウェスト響の音楽監督やボストン響のアソシエイト・コンダクターなどを歴任。現在は米ミシガン州のグラント・ラビッツ響の音楽監督を務め、2018年には同響を初のカーネギーホール公演に導いた。ボストン響には10年にズッカーマンとの共演でデビューし、翌年にはテツラフとの共演で成功を収めた。11年には同響のカーネギーホール公演でも指揮。またタングルウッド音楽祭では、フレイレ、ティボーデなどと共演を重ねている。14年にはブーレーズの代役としてシカゴ響にデビューして高く評価され、ヤンソンスのカヴァー指揮者としてロイヤル・コンセルトヘボウ管の欧州ツアーに帯同。このほか、ブラジルやアルゼンチンの主要楽団をはじめ、ベルリン・ドイツ響、フランス放送フィル、トゥールーズ・キャピトル国立管、ルツェルン響、ボルティモア響、ピッツバーグ響、ヒューストン響、シアトル響、トロント響、シドニー響などに客演している。20年1月にもボストン響の定期演奏会に客演する。

8/18
三大交響曲

8/21
三大協奏曲

Maestro

8/24
土曜マチネー

8/25
日曜マチネー

Maestro

指揮

尾高忠明
(名誉客演指揮者)

TADAAKI OTAKA, Honorary Guest Conductor

日本を代表する名匠
心震わす〈悲愴〉



©Martin Richardson

国内外の名だたるオーケストラと共演を重ねる、日本を代表する名匠がチャイコフスキー〈悲愴〉を取り上げる。強い絆で結ばれた読響から、どんな豊潤なサウンドを引き出すだろうか。近年ますます深まる円熟の境地を堪能したい。

1947年鎌倉生まれ。桐朋学園大学で齋藤秀雄に師事し、70年に第2回民音指揮者コンクールで第2位に入賞。オーストリア政府から奨学金を得てウィーン国立アカデミーに留学し、指揮をスワロフスキーに、オペラ指揮法をシュパンナーゲルに学んだ後、東京フィル常任指揮者(74～91年/現桂冠指揮者)に就任。BBCウェールズ響首席指揮者(87～95年/現桂冠指揮者)を務め、エルガーやブリテンなどのイギリス音楽を手がけた。

読響では92～98年に第6代常任指揮者を務めた間、数々の名演を生み、現在は名誉客演指揮者の地位にある。札幌響音楽監督(2004～15年/現名誉音楽監督)、メルボルン響首席客演指揮者(10～12年)、新国立劇場オペラ芸術監督(10～14年)を歴任。現在は、N響正指揮者、大阪フィル音楽監督などを務めている。国内の主要オーケストラはもちろんのこと、ロンドン響、BBC響、ベルリン放送響、フランクフルト放送響、バーミンガム市響など世界各地の楽団に客演。サントリイ音楽賞をはじめ、英国エリザベス女王から大英勳章CBE、英国エルガー協会から日本人初のエルガー・メダルなどを受与される。録音も多数。

東京芸術大学名誉教授、相愛大学、京都市立芸術大学客員教授、国立音楽大学招聘教授。



©Naoya Yamaguchi

ヴァイオリン

高木凜々子

RIRIKO TAKAGI, Violin

2015年チャイコフスキー国際コンクール第2位で話題を呼んだ新鋭。1988年ウラジオストク生まれ。モスクワ音楽院卒業後、ベルリンのハンス・アイスラー音楽大学で学ぶ。シャホフスカヤ、ヘルメルソンらに師事。ケンブリッジ国際コンクール優勝、北京国際音楽コンクール優勝、パウロ国際コンクールではロシア人として初めての入賞(第3位)に輝いた。これまでにゲルギエフ、スピヴァコフ、フェドセーエフ、ユロフスキらの指揮でマリインスキー歌劇場管、モスクワ・フィル、ロシア国立響、ロシア・ナショナル管、ベルリン響などと共演している。アムステルダム・コンセルトヘボウ、マリインスキー劇場をはじめ、世界各地でリサイタルを開催。ヴェルビエ音楽祭、モスクワ・イースター音楽祭などにも参加している。読響初登場。

巨匠アッカルドが認める若き実力派。1996年生まれ。音楽一家(両親は読響のヴァイオリン奏者)に育ち、3歳からヴァイオリンを始める。東京芸術大学音楽学部卒業。2012年バルトーク国際コンクール第2位及び特別賞、東京音楽コンクール第2位及び聴衆賞受賞。18年5月にはニューヨーク日本総領事館でリサイタルを開催し、コシチュシコ財団から新人賞を受賞した。日本各地でリサイタルを開催し、飛騨高山音楽祭などに参加している。これまでにセグド・ハンガリー国立響、ブダペストのアニマ・ムジツェ室内合奏団、神奈川フィル、広島響、大阪響など国内外の楽団と共演。今後も東響、東京フィルなどとの共演を予定している。星はるみ、篠崎功子、清水高師の各氏に師事。18年度ローム音楽奨学生。今回が読響初登場。



チェロ

アレクサンドル・ラム

ALEXANDER RAMM, Cello

8/21
三大協奏曲

Artist

8/21
三大協奏曲

Artist

8/21
三大協奏曲

Artist



ピアノ

アレクサンダー・マロフェーエフ

ALEXANDER MALOFEEV, Piano

ゲルギエフが絶賛する、ロシアが生んだ17歳の天才が読響に初登場。2001年モスクワ生まれ。14年に若い音楽家のためのチャイコフスキー国際音楽コンクールで優勝して話題となった。モスクワ国際グランドピアノコンクール優勝、ブレシア・ベルガモ国際ピアノ音楽祭では最優秀若手演奏者賞受賞。“ミレニアル世代のピアノの申し子”として注目を集めている。これまでにゲルギエフ、スピヴァコフ、フェドセーエフ、山田和樹らの指揮で、マリインスキー歌劇場管、ロシア・ナショナル管、モスクワ放送響、ミラノ・スカラ座管などと共演。ボリショイ劇場、アムステルダム・コンセルトヘボウなどで活躍している。今年8月にラ・ロック・ダントロン国際ピアノ音楽祭に出演し、10月にはシャイー指揮ルツェルン祝祭管と共演する。

8/24
土曜マチネー

8/25
日曜マチネー

Artist

「数多くの新星の中で、将来トップになる存在」として注目を浴びるスペインの名花が読響との共演で日本デビューを飾る。ソフィア王妃音楽大学、ベルリンのハンス・アイスラー音楽大学でブロン、ヴァイトハースらに師事。巨匠メータとの共演でデビューして話題を呼んだ。2011年にはサラサーテ国際コンクールでスペイン人として初の優勝に輝いた。リスボン国際コンクール、ノボシビルスク国際コンクールなどで入賞。ロベス=コボス、ロス=マルバ、ロッキントンらの指揮で、バルセロナ響、カスティージャ・イ・レオン響、サンクトペテルブルグ国立アカデミー響、カンヌ管などと共演。最新の録音『ブラームス&フランク：ヴァイオリン・ソナタ集』は、『レコード芸術』誌の推薦盤に選出された。



ヴァイオリン

アナ・マリア・ヴァルデラーマ

ANA MARÍA VALDERRAMA, Violin

シューベルト

交響曲 第7番 口短調 D759 〈未完成〉

フランツ・シューベルト（1797～1828）の創作の中期（1820～24年）には作曲を放棄して完成させることができなかった作品がいくつかあるが、この交響曲もそのひとつである。シューベルトは、これまで誰も聴いたことがない響きを交響曲で実現したいと考えて、試行錯誤の末、口短調の新しい交響曲に着手する。尊敬するベートーヴェンの交響曲第5番を手本に、トロンボーンを3本用い、主題を循環させて全体を構成しようとした。ピアノ・スケッチは第3楽章の途中まで完成していたので、最初の二つの楽章の作曲は順調に進んだ。しかし、第3楽章に入ったところで中断されてしまう。さらに翌年には自筆譜を年長の知人に渡してしまい、作曲が再開されることはなく、忘れ去られてしまった。そのためこの交響曲は、後に〈未完成〉の名で呼ばれるようになるが、それは楽章構成が未完成だからであって、音楽は不朽の名作とするに相応しい内容を備えている。

楽譜はシューベルトが亡くなった後、長い間埋もれたままになっていた。1865年になってようやく、ウィーン楽友協会の指揮者ヨハン・ヘルベックによって発見され、彼の指揮で初演された。

第1楽章 アレグロ・モデラート チェロとコントラバスのもの悲しい導入に続いて、オーボエとクラリネットでのびやかな第1主題が歌われ、チェロで始まる第2主題は憧れに満ちている。展開部は、冒頭の音型をもとに劇的な高まりをみせ、響きを増し、深い情感をたたえる。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート ホルンとファゴットに導かれて、弦楽器による穏やかな第1主題が現れる。木管楽器で歌い継がれる第2主題が提示され、ホルンと木管楽器の対話を経て主部が再現される。安らぎに満ちた美しさと苦悩の間に揺れ動きながら静かな余韻を残す。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1822年／初演：1865年12月17日、ウィーン／演奏時間：約25分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

8/18
三大交響曲

Program Notes

ベートーヴェン

交響曲 第5番 八短調 作品67 〈運命〉

冒頭の劇的な四つの音から成る動機をルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)が「運命はこのように扉をたたく」と語ったという逸話から、交響曲第5番は、〈運命〉の通称で親しまれている。しかし今ではこれは、弟子のアントン・シンドラーによる作り話との説が有力である。

第5番は、断片的なスケッチこそ〈英雄〉交響曲(第3番)を完成直後の1804年頃からみられるが、実際の作曲は、07年から翌年にかけて第6番〈田園〉とともに集中的に行われた。02年に精神的な危機を克服して以来、個性的な傑作の数々が生み出されたが、これらの交響曲は、そのひとつの到達点といえるだろう。第5番では、この強烈な印象を残す「運命動機」が様々なかたちで各楽章に現れ、交響曲全体を統一する。そしてこの動機を中心とする闘争的な性格と、後半では「闇から光へ」という最終的に勝利へ至る道筋が音楽で表現されることになった。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 「運命動機」が次々とたたみかける第1主題と穏やかな第2主題によるソナタ形式。緊迫した音楽が展開されるなか、再現部でオーボエの旋律が浮かび上がると、ふと流れが止まった印象を与える。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート 第1楽章の緊張がほぐれる、優しい主題で始まる。副主題を含む主題部に、五つの変奏が続く。

第3楽章 アレグロ 低音の弦楽器の湧き上がるような主題とホルンによる「運命動機」の変形を用いたスケルツォ楽章。明朗な中間部「トリオ」を挟み、最後は弱音のティンパニの連打に導かれて切れ目なく終楽章に突入する。

第4楽章 アレグロ 音楽は短調から長調へと移り、「闘争から勝利へ」導かれる。その勝利を強調するかのように、この終楽章で初めて3本のトロンボーン、ピッコロ、コントラファゴットが採用された。力強い第1主題と「運命動機」に由来する第2主題が提示される。展開部で第3楽章の主題が現れ、一瞬、過去の闇を回想するが、最後は長大なコーダで全曲を堂々と締めくくる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1807～08年／初演：1808年12月22日、ウィーン／演奏時間：約31分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ドヴォルザーク

交響曲 第9番 ホ短調 作品95 〈新世界から〉

チェコの作曲家アントニン・ドヴォルザーク(1841～1904)の最後の交響曲となった第9番〈新世界から〉は、アメリカ滞在中の1893年に作曲された。前年にニューヨークのナショナル音楽院の初代院長に招かれて渡米したドヴォルザークは、都会の喧騒や冬の厳しい寒さに戸惑いながらも、新しい土地で新たな創作意欲を駆り立てられた。当地で知った黒人霊歌やアメリカ先住民の歌や民謡に触れるうちに、アメリカの音楽への興味も広がっていった。

ドヴォルザークは、自作にこれらの要素を取り入れるが、民謡の旋律をそのまま引用するのではなく、アメリカ的な素材にスラヴ的な情熱を融合させて用いた。この交響曲の中間の二つの楽章は、ロングフェローがアメリカ先住民の神話的英雄を扱った長編物語詩『ハイアワサの歌』から着想を得て、自然や人間の深い感情に分け入るような詩を通して、ボヘミアへの熱い思いを募らせた。

第1楽章 アダージョ～アレグロ・モルト ゆるやかな序奏に続き、力強い主部ではホルンの鋭いリズムが特徴的な第1主題が示される。フルートとオーボエのボヘミアのポルカを思わせる主題やフルートによる鄙びた味わいの第2主題を加えて展開される。

第2楽章 ラルゴ 有名な旋律が、イングリッシュ・ホルンでしみじみと歌われる。中間部は管楽器がコントラバスのピッツィカートとともに歌い、ヴァイオリンの豊かな旋律も印象的である。

第3楽章 モルト・ヴィヴァーチェ ティンパニとトライアングルの強打で開始される民俗舞曲風の音楽。主題が様々な楽器に受け渡され、木管楽器が主体となる中間部は、軽やかに歌われる。

第4楽章 アレグロ・コン・フオーコ 弦楽器の序奏の後、トランペットとホルンによる強烈な第1主題と、クラリネットによる穏やかな第2主題が現れる。展開部ではこれまでの三つの楽章の主題が回想され、壮大なクライマックスへと向かう。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1893年／初演：1893年12月16日、ニューヨーク／演奏時間：約40分

楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(トライアングル、シンバル)、弦五部

8/21
三大協奏曲

8/24
土曜マチネー

8/25
日曜マチネー

Program Notes

メンデルスゾーン

ヴァイオリン協奏曲 木短調 作品64

ドイツ・ロマン派を代表する作曲家、フェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）。20歳の時に〈マタイ受難曲〉の復活演奏をしてバッハ再評価に貢献し、1835年にはライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者に就任、そして43年にライプツィヒ音楽院を創設する。

この作品が構想されたのは、1838年である。しかし、ベルリンの宮廷楽団の楽長に就任するなど多忙を極め、創作は断続的であった。ゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスター、フェルディナント・ダーヴィトに助言を受けながら作曲を進め、45年3月に初演を果たす。その際、メンデルスゾーンは病氣療養中のため、彼の弟子で同楽団副指揮者ニルス・ゲーゼが指揮台に立ち、ダーヴィトがソリストを務めた。第1楽章では、オーケストラによる長い前奏を置かずに独奏ヴァイオリンによって音楽が始まり、展開部から再現部の間にカデンツァを挟む。また、三つの楽章を続けて演奏するなど、当時としては画期的な試みがさまざまに見られる。

第1楽章 弦楽器による2小節の序奏に導かれ、独奏ヴァイオリンが哀愁に満ちた第1主題を奏でてゆく。独奏ヴァイオリンの華やかな演奏技巧の生かされたソナタ形式による楽章。

第2楽章 第1楽章から鳴り響くファゴットの持続音にいざなわれ、8小節の序奏に続いて、独奏ヴァイオリンによる主題が現れる。3部形式に基づいた音楽は、優美な情趣に満ち溢れている。

第3楽章 木短調の序奏には、第2楽章中間部のモティーフが用いられており、前楽章と緊密に結びついている。木長調に転じると、二つの主題が競り合うように展開し、華麗なフィナーレを彩る。

〈道下京子 音楽評論家〉

作曲：1844年／初演：1845年3月13日、ライプツィヒ／演奏時間：約26分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ドヴォルザーク

チェロ協奏曲 口短調 作品104

アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）はボヘミアの出身で、若い頃は楽団のヴィオラ奏者として活動していた。ブラームスに見出されたのち、〈スラヴ舞曲集〉によって国際的に知られるようになる。後期ロマン派のスタイルを礎とし、そこにボヘミアの民俗的な表現を取り入れ、親しみやすい独自の作風を確立した。

米国ナショナル音楽院の院長の職に就くために、1892年から95年までニューヨークで暮らすことになったドヴォルザーク。その間に、ボヘミア出身のチェロ奏者ハヌシュ・ヴィハンから、チェロ協奏曲の作曲を依頼される。94年11月、この作品の創作に着手したドヴォルザークは、翌年2月にいったん書き上げ、さらに推敲を加えて6月に最終的な完成に至った。初演はドヴォルザークの指揮、そしてレオ・スターンのチェロ独奏により、96年にロンドンで行われた。

アメリカ滞在中のドヴォルザークの作品の多くには、アメリカの民謡や歌曲が取り入れられている。しかし、この協奏曲は祖国ボヘミアへの郷愁を強く感じさせる。ドヴォルザークがアメリカから帰郷した95年、彼の初恋の人で義姉にあたるヨゼフィーネ・コウニツォヴァーが亡くなってしまう。彼女はドヴォルザークの歌曲〈私にかまわないで〉を好んでいたので、第2楽章中間部と第3楽章コーダに、彼はこの歌曲の一部を引用する。とりわけ第3楽章のコーダは、彼女が亡くなった後に書き換えられており、ドヴォルザークの哀しみや故郷への愛が込められている。

第1楽章 曲の冒頭にクラリネットが奏でる主要主題と、強奏によるトゥッティに続いて示されるホルンによる表情豊かな副主題を軸に、独奏チェロが華麗な妙技を繰り広げていく。

第2楽章 3部形式に基づき、木管楽器が歌い上げる牧歌的な旋律が印象的な主部ののち、ト短調の中間部では表情が一変する。美しい叙情性に満ち満ちた音楽。

第3楽章 自由なスタイルのロンド形式で、前述したコーダが付加されている。

〈道下京子 音楽評論家〉

作曲：1895年／初演：1896年3月19日、ロンドン／演奏時間：約40分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル）、弦五部、独奏チェロ

8/21
三大協奏曲

Program Notes

チャイコフスキー

ピアノ協奏曲 第1番 変口短調 作品23

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）は、西欧の音楽語法を土台にウクライナの民謡などを融合し、独自の透明で優美な表現を確立した。法務省に勤務したものの、音楽を志して1861年にアントン・ルビンシテインがサンクトペテルブルグに開設した音楽学校で専門教育を受ける。卒業後はアントンの弟、ニコライがモスクワに創設した音楽院へ、作曲の教師として赴任した。

チャイコフスキーは3曲のピアノ協奏曲を手掛けている。本日演奏される第1番は1875年2月に書き上げられた。彼はニコライ・ルビンシテインに初演を依頼したところ、ニコライは形式や調性の選択などの点での「不器用さ」を指摘し、作品を批判する。

そこでチャイコフスキーは、指揮者で名ピアニストのハンス・フォン・ビューローにこの曲の初演を依頼すると、ビューローは作品を絶賛。同年10月にボストンで初演された後、作品には修正や改訂が施され、現在演奏されている〈ピアノ協奏曲 第1番〉も改訂稿である。第1楽章において長大な導入部を取り入れ、誰もが聴いたことのある有名なメロディが現れるが、主部で回帰されることはない。何と言っても、魅力は超絶技巧的なピアノ・パートの妙技である。分厚い和音やオクターヴ奏法など、当時の新しいピアノ奏法が随所に用いられ、“ヴィルトゥオーソ協奏曲”を代表する絢爛豪華な作品である。

第1楽章 堂々とした風格の長い導入部の後、変口短調のソナタ形式による主部が続く。

第2楽章 夢幻的な雰囲気^{かんじょ}の緩徐楽章。中間部では、フランスのシャンソンからの引用をヴィオラとチェロが奏でる。

第3楽章 オーケストラの前奏に続き、ウクライナ民謡をとり入れたロンド主題をピアノが提示する。この主題は、のちに現れるヴァイオリンによる変ニ長調の副主題とともに緊密に展開し、圧倒的なクライマックスを形成する。

〈道下京子 音楽評論家〉

作曲：1875年／初演：1875年10月25日、ボストン／演奏時間：約32分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

メンデルスゾーン

序曲〈フィンガルの洞窟〉 作品26

ドイツ・ロマン派の代表的作曲家フェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）が残した演奏会用序曲の中で、最も親しまれている1曲。10代で多数の作品を完成した早熟の天才メンデルスゾーンは、20歳時の1829年3月ベルリンにて、バッハの〈マタイ受難曲〉の復活上演を成し遂げた。そして直後の4月に初めてイギリスを訪問し、ロンドンで自作の指揮やピアノ演奏を披露。さらには、7月末から3週間にわたるスコットランド旅行を行い、北西沖の大西洋にあるヘブリディーズ諸島——スタッフア島のフィンガルの洞窟を含む——を訪れた。本作はその際の印象に基づく音楽である。

着想されたのは旅行中の29年8月だったが、本格的な作曲は30年秋に開始され、同年12月に旅行先のローマで完成。改訂が加えられた後の32年5月、2度目の訪問となったロンドンで、自身の指揮により初演された。だが、メンデルスゾーンは35年の総譜出版までに再三改訂を行い、タイトルも二転三転した。そのため〈ヘブリディーズ諸島〉と〈フィンガルの洞窟〉が併用されることになり、日本では後者の名で広まったが、欧米では作曲者の最終的な意向とみられる前者がメイン・タイトルとなっている。

すなわち本作は、奇怪な形をしたフィンガルの洞窟そのものの描写音楽ではなく、洞窟を含むヘブリディーズ諸島や海全体の雰囲気^{ほうふつ}を表現した“音画”というべき楽曲。波の動きや嵐など具体的な光景^{ほうふつ}を彷彿させる場面もまじえながら描いたその技法は実に見事で、ワーグナーも「第一級の風景画家」と賞賛した。

曲は、アレグロ・モデラート、口短調、ソナタ形式。波を思わせる低音の第1主題で始まり、木管楽器のなめらかなフレーズを挟んで、ファゴットとチェロで広がりのある第2主題が奏される。第1主題を中心に盛り上がりを増していき、クライマックスを形成後、両主題が再現され、力強い終結部に至る。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1830年／初演：1832年5月14日、ロンドン／演奏時間：約10分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

※メンデルスゾーン〈ヴァイオリン協奏曲 ホ短調〉の楽曲紹介は12ページをご覧ください。

8/24

土曜マチネー

8/25

日曜マチネー

Program Notes

チャイコフスキー

交響曲第6番 口短調 作品74〈悲愴〉

ロシアの大家ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）最後の作品にして、古今の交響曲の中でも上位の人気を誇る1曲。1892年末に着想後、93年に入って本格的に着手され、同年8月末に完成。10月28日、作曲者の指揮によりペテルブルグで初演された。ところが彼は11月2日にコレラを発症し、4日後の6日に世を去った。

こうした経緯とアダージェョ・ラメントーソ（悲しく、悼んで）のフィナーレに象徴される曲の悲劇性が相まって、「死を予感した作品」や「自殺に至った作品」との見方がなされることになり、20世紀後半にはある音楽学者が出した「同性愛醜聞の隠匿のため、秘密会議にて自殺を強要された」との見解が定説になりかけたこともある（現在、死因は病氣説が主流）。

曲自体はやはり悲愴感が強く、特にフェルマータの付いた休符で消えていく終結は、人生の最期を想起させなくもない。ただし、当時の交響曲では異例の第4楽章のみならず、曲調が激変する第1楽章、珍しい5/4拍子のワルツの第2楽章、南イタリアの舞曲タランテラのリズムを用いて、スケルツォと行進曲を合体させた第3楽章……と全楽章がユニークな特徴を備えており、見方を変えれば、新機軸を全面的に打ち出した意欲作ともいえる。

第1楽章 アダージェョ～アレグロ・ノン・トロppo ^{あんうつ} 暗鬱な序奏から、ヴィオラとチェロが第1主題を奏する主部へ移り、激しさを増した後、甘美な第2主題が登場。激烈な爆発に始まる展開部を経て、静かに終結する。

第2楽章 アレグロ・コン・グラツィア 変則的なワルツ。2+3拍子の不安定感もあって、どこか暗い影を宿している。

第3楽章 アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ 細かな動きに始まり、ダイナミックな行進曲となって高揚を続ける。

第4楽章 フィナーレ、アダージェョ・ラメントーソ 悲痛な主題を中心とした終曲。中間部は陶酔的でもある。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1893年／初演：1893年10月28日（ロシア暦16日）、ペテルブルグ／演奏時間：約46分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、銅鑼）、弦五部